き見せ給へ」といひて、我が裝束上下、帶太刀まで皆誦經にしけり。自らも申しもやらず泣きけり。初は何人の詣でたるならむと聞き居たるに、我が上をかく申しつゝ、我が裝束などかく誦經にするを見るに、心も肝もなく、悲しき事物に似ず、走りや出でなましと千度思ひけれど、思ひ返し〳〵ゐて、夜一夜泣き明して朝に見れば、蓑も何も涙のかゝりたる所は、血の涙にてなむありける。「いみじう泣けば、血の涙といふものは、ある物になむありける」とぞいひける。「その折なむ、走りも出でぬべき心地せし」とぞ後に云ひける。かゝれど猶え聞かず。御はてになりて御服ぬぎに、萬の殿上人河原に出でたるに、童の異樣なるなむ、柏葉に書きたる文をもて來たる。取りて見れば、

皆人は花の衣になりぬめり苔の袂よかわきだにせよ

とあり。見れば、この良少將の手に見なしつ。「いづら」といひて、持て來し人を世界に覓むれどなし。法師になりたるべしとは、これにてなむ皆人知りにける。されど何地にかあらむといふ事、更にえ知らず。かくて世の中にありといふ事を聞し召して五條后宮より、內舍人を御使にて山々尋ねさせ給ひける。此處にありと聞きていけばうせぬ。彼處にありと聞きて尋ぬれば又うせぬ。えあはず辛うじて、隱れたる所にゆくりもなくいにけり。え隱れあへで逢ひにけり。宮より御使になむ參り來つる」とて、「仰事には、かう帝もおはしまさず、睦じく覺し召しゝ人を、かたみと思ふべきに、かく世に失せかくれ給ひにければ、いとなむ悲しき。などか山林に行ひ給ふとも、こゝにだに消息し給はぬ。御里とありし所にも、音もし給はざなれば、いと哀になむ泣き侘ぶなる。いかなる御心にて、かうは物し給ふらむと聞えよ、とてなむ仰せられつる。此處彼處尋ね奉りてなむ、參り來つる」といふ。少將大德うち泣きて、「仰事畏まりて承りぬ。帝崩れ給ひて、畏き御蔭にならひて、おはしまさぬ世に、誓しもあり經べき心地もし侍らざりしかば、かゝる山の末にも籠り侍りて、死なむを期にてと思う給ふるを、未なむかく怪しき事は生き廻らひ侍る。いとも畏く訪はせ給へる事、童の侍る事は、更に忘れはべる時もはべらず」とて、

限なき雲井のよそに別るとも人を心におくらさむやは

となむ申しつると啓し給へ」と云ひける。この大德の顏容貌姿を見るに、悲しき事物に似ず。その人にもあらず、影の如くになりて、只蓑をのみなむ著たりける。少將にてありし時の樣の、いと清げなりしを思ひ出でて、涙も留まらざりけり。悲しとても片時人のゐるべくもあらぬ山の奥なりければ、泣く〳〵「さらば」と云ひて歸り來て、この大德尋ね出でて、ありつるよしを、上の條啓せさせけり。后宮もいといたう泣きたまふ。侍ふ人々もいらなくなむ泣き哀がりける。宮の御かへりも、人々の消息も、いひつけて又遣れりければ、ありし所にも又なくなりにけり。

第百六十四段

小野小町といふ人、正月に清水に詣でにけり。行などして聞くに、怪しう尊き法師の聲にて、讀經し陀羅尼讀む。この小野小町怪しがりて、つれなきやうにて、人を遣りて見せければ、「蓑一つ著たる法師の、腰に火打笥など結ひつけたるなむゐたる」と云ひけり。かくて猶聞くに、聲いと尊くめでたう聞ゆれば、たゞなる人にはよもあらじ。もし少將大德にやあらむと思ひけり。いかゞいふとて、「この御寺になむはべる。いと寒きに、御衣ひとつ貸し給へ」とて、

岩の上の旅寢をすればいと寒し苔の衣を我にかさなむ

といひやりたりける返事に、

世をそむく苔の衣はただひとへ貸さねばうとしいざ二人寢む

といひたるに、更に少將なりけりと思ひて、たゞにも語らひし中なりければ、逢ひて物もいはむと思ひていきければ、搔い消つやうに失せにけり。ひと寺覓めさすれど、更に逃げて失せにけり。かくて失せにける大德なむ、僧正までなりて、花山といふ寺にすみ給ひける。俗にいますかりける時の子どもありけり。太郎は左近將監にて、殿上してありける。かく世にいますかりと聞く時だにとて、母もやりければ、行きたりければ、「法師の子は法師なるぞよき」とて、これも法師になして

けり。かくてなむ、

折りつれば手首にけがる立てながら三世の佛に花たてまつる

といふも、僧正の御歌になむありける。この子を推し爲し給びける大德は、心にもあらでなりたりければ、親にも似ず、京にも通ひてなむし歩きける。この大德の親族なりける人の女の、內裏に奉らむとて傅きけるを、密に語らひてけり。親聞きつけて、男をもすげなくいみじう云ひて、この大德を寄せずなりにければ、山に坊してゐて、言の通ひもえせざりけり。いと久しうありて、この騷がれし女の兄どもなどなむ、人のわざしに山に登りたりける。この大德のすむ所に來て、物語などしてうち休みたりけるに、衣の頸にかきつけける。

白雲のやどる嶺にぞおくれぬる思ひのほかにある世なりけり

と書きたりけるを、この兄の兵衞尉は、え知らで京へいぬ。妹見つけてあはれとや思ひけむ。これは僧都になりて、京極僧都といひてなむ、いますかりける。

第百六十五段

昔內舍人なりける人、大三輪の御幣使に大和國に下りけり。井手といふ邊に、清げなる人の家より、女ども童いで來て、このいく人を見る。きたなげなき女、いとをかしげなる子を抱きて、門の

もとに立てり。この兒の顔のいとをかしげなりければ、目を留めて、「その子此方率て來」といひければ、この女寄り來たり。近くて見るに、いとをかしげなりければ、「ゆめ他夫し給ふな。我にあひ給へ。大きになり給はむ程に參り來む」と云ひて、「これを記念にし給へ」とて帶を解きて取らせけり。さて子のしたりける帶を解き取りて、持たりける文に引きゆひて、持たせていぬ。この子年六七ばかりにありけり。この男色好みなりける人なれば、いふになむありける。これをこの子は忘れず思ひもたりけり。男は早う忘れにけり。かくて七八年ばかりありて、又同じ使に差されて、大和へいくとて、井手の邊に宿りて、居て見れば、前に井なむありける。それに水汲む女どもあるが、いふやう。

（一本云、その行方もとほらぬと、たゞ一口するを云ひさしつ。）

第百六十六段

伊衡宰相、中將にものし給ひける時、故兵部卿宮の別當し給ひければ、常に參りなれて、御達も語らひ給ひけり。その君、內裏より罷出給ひけるまゝに、風になむあひ給ひて煩ひ給ひける。訪問に藥の酒肴など調じて、兵衞命婦なむやり給ひける。その返事に、「いと嬉しく訪ひ給へる、あさましう、かゝる病もつくものになむありける」とて、

青柳のいとならねども春かぜの吹けばかたよる我が身なりけり

とあれば、兵衞命婦、かへし、

いささめに吹く風にやはなびくべき野分過しし君にやはあらぬ

第百六十七段

今の左大臣、少將にものし給ひける時に、式部卿宮に常に參り給ひけり。かの宮に、やまとといふ人候ひけるを、物など宣ひければ、いと理なく色好む人にて、女いとをかしうめでたしと思ひけり。されど常にあふ事難かりけり。やまと、

人知れぬ心のうちにもゆる火は煙も立たでくゆりこそすれ

と云ひやりければ、かへし、

富士の嶺の絶えぬ思ひもあるものをくゆるは辛き心なりけり

とありけり。かくて久しう參り給はざりける比、女いといたう待ち侘びにけり。いかなる心地しければか、さるわざはしけむ、人にも知らせで、車に乘りて內裏に參りにけり。左衞門の陣に車を立てて、渡る人を呼び寄せて、「いかで少將君に物聞えむ」といひければ、「怪しき事かな。誰と聞ゆる人のかゝる事はし給ふぞ」など云ひすさびて入りぬ。又渡れば同じ事いへば、「いさ殿上などにや

おはしますらむ。いかでか聞えむ」など云ひて入りぬる人もあり。袍衣きたる者の入りけるを、強ひて呼びければ、怪しと思ひて來たりけり。「少將君やおはします」と問ひけり。「おはします」といひければ、「いと切に聞えさすべき事ありて、殿より人なむ參りたると聞え給へ」とありければ、「いと易きことなり。そも〳〵かく聞え次ぎたらむ人をば忘れ給ふまじや。いと哀に夜更けて、人少にてものし給ふかな」と云ひて、入りていと久しかりければ、無期に待ち立てりける。辛うじて、これも言ひつがでや出でぬらむ、いか樣にせむと思ふ程になむ、出で來たりける。さていふやう、「御前に御遊などし給へるを、辛うじてなむ聞えつれば、誰がものし給ふならむ、いと怪しき事、確に問ひ奉りて來となむ宣ひつる」といへば、「眞實には下つ方よりなり。自ら聞えむ事を聞え給へ」と云ひければ、「さなむ申す」と聞えければ、さにやあらむと思ふに、いと怪しうもをかしうも覺え給ひけり。暫しといはせて立ち出でて、廣幡中納言の侍從にものし給ひける時、「かゝることなむあるを、いかゞすべき」とたばかり給ひけり。さて左衞門の陣に、宿直所なりける屏風疊など持ていきて其處になむ下い給ひける。「いかでかくは」と宣ひければ、「何かはいとあさましう、物のおぼゆれば」（以下闕文）

第百六十八段

亭子の帝、石山に常に詣で給ひけり。國司、民疲れ國亡びぬべしとなむ怪ぶると聞し召して、「こと國々の御莊などに仰せて」と宣へりければ、持て運びて、御まうけを仕うまつりて詣で給ひけり。近江守、いかに聞し召したるにやあらむと欺き恐れて、又無下にさて過し奉りてむやとて歸らせ給ふ。打出の濱に、尋常ならずめでたき假屋どもを造りて、菊の花のいと面白きを植ゑて、御まうけ仕うまつれりけり。國守は怖ぢ恐れて、外に隱れをりて、只黑主をなむ居ゑ置きたりける。おはしまし過ぐる程に、殿上人「黑主は、などてさては候ふぞ」と問ひけり。院も御車おさへさせ給ひて、「何しに此處にはあるぞ」と問はせ給ひければ、人々問ひけるに申しける。

さざら浪間もなく岸を洗ふめりなぎさ清くば君とまれとか

と詠めりければ、これにめで給ひてなむ、とまりて、人々に物賜ひて歸らせ給ひける。

第百六十九段

良峯宗貞少將、ものへ行く道に、五條邊にて雨いたう降りければ、荒れたる門に立ち隱れて見いるれば、五間ばかりなる檜皮屋の下に、土やぐらなどあれど、殊に人など見えず、歩み入りて見れば、階の間に梅いとをかしう咲きたり。鶯も鳴く。人ありとも見えぬ御簾のうちより、薄色の衣、濃き衣の上に著て、丈だちいとよき程なる人の、髮丈ばかりならむと見ゆるなるが、

よもぎ生ひて荒れたる宿を鶯の人來と鳴くやたれとか待たむ

とひとりごつ。少將、

來たれどもいひしなれねば鶯の君に告げよと教へてぞ鳴く

と聲をかしうて言へば、女驚きて、人もなしと思ひつるに、ものしき樣を見えぬる事と思ひて、物も云はずなりぬ。男緣に昇りて居ぬ。「などかもの宣はぬ、雨の理なく侍りつれば、止む迄はかくてなむ」といへば、「大路よりはまさりて、此處はなか〳〵」と答へけり。時は正月十日の程なりけり。簾の內より褥さし出でたり。引き寄せて居ぬ。簾も緣は蝙蝠に食はれて所々なし。內のしつらひ見入るれば、昔覺えて疊などよかりけれど、口惜しくなりにけり。目もやう〳〵暮れぬれば、やをら辷り入りて、この人を奧にも入れず。女くやしと思へど、制すべき樣もなくて、いふかひなし。雨は夜一夜降りあかして、又の翌朝ぞ少し空晴れたる。男は女の入らむとするを、「只かくて」とて入れず。日も高うなれば、この女の親、少將に饗應すべき方のなかりければ、小舍人童ばかり留めたるに、堅鹽肴にして酒を飲ませて、少將には、廣き庭に生ひたる菜を摘みて、蒸物といふ物にして、茶碗に盛りて、箸には梅の花の盛なるを折りて、その花瓣に、女の手にてかく書けり。

君がため衣の裾を濡らしつつ春の野に出でて摘める若菜ぞ

男これを見るに、いと哀に覺えて引き寄せてくふ。女わりなう恥しと思ひて臥したり。少將起きて、小舍人童を走らせて、卽ち車にて、まめなるものさま〴〵に持て來たり。「迎へに人のあれば、今又も參り來む」とて出でぬ。それより後、絕えず自らも來訪ひけり。萬の物くへども、なほ五條にてありし物、珍らしうめでたかりきと、思ひ出でける。年月を經て仕うまつりし君に、少將おくれ奉りて、變らむ世を見じと思ひて、法師になりにけり。もとの人の許に裂裝洗ひにやるとて、

霜雪のふるやがしたに獨寢のうつぶしぞめの麻のけさなり

となむありける。

大和物語抄云。
又或本に世の常の外なりし事加はれり。そのてにをはなど聊かおぼつかなき所などもあれど、たぐへる本を見侍らねば、改め聞えむ由もなし。さすがに捨て難き事どもなれば、ことに左に書き連ね侍る。

第百七十段

今は昔、二人して一人の女をよばひけり。先立ちてよばひける男、官まさりて、その時の帝近う仕うまつりけり。後よりよばひける今一人の男は、その同じ帝の母后の御兄末にて、官後れたりけり。それをいかゞ思ひけむ、後よりよばひける男に、かの女は逢ひにけり。さりければ、この初より云ひける男は、宿世の深くありけると思ひけり。かくて萬に宜しからず、たい〳〵しき事を、物の折毎に、帝のなめしと思し召しぬべき事を、作り出でつゝ聞えないける間に、この男は宮仕いと苦しうして、只逍遙をして、歩行を好みければ、衛府官にて、宮仕をもせずといふ事いで來て、そのありける官をぞ取り給ひてける。さりければ、男、世の中を憂しと思ひてぞ、籠りゐて思ひける。人の命といふもの、幾世しもあるべきものにあらず、思ふ時は、はかなき官も何にかはあるべき。かゝる浮世にはまじらず、一向に山深く離れて、行にや就きなむと思ひければ、近くをだに放たず、

父母の愛しくする人なりければ、萬の憂きも辛きもこれにぞさはりける。時しも秋にしもありければ、物のいとあはれに覺えて、夕暮にかゝる獨言をぞ云ひたりける。

浮世には門鎖せりとも見えなくになど我が宿の出でがてにする

と云ひてひがみ居りける間に、なまいどみて時々物などいひける人の許より、蔦の紅葉の面白きを折りて、やがてその葉に「これを何とか見る」とて書き遣せける。

うきたつた野山の露のもみぢ葉は物思ふ秋の袖にぞありける

といひやりけれど、返しもせずなりにければ、かくとしもなし。かゝる事どもを聞き哀がりて、この男の友達ども、集りて來て慰めければ、酒飲ませなどして、聊か遊のけぢかきぞしける。夜になりければ、この男、かゝる歌をぞ詠みたりける。

身のうみの思ひなぎさは今宵かな浦に立つ浪うち忘れつつ

とぞ詠みたりける。かゝりければ、是をあはれがりてぞ、あはれに明しける。これも返しなし。さて又の夜の月をかしかりければ、簀子にゐて、大空を眺めてゐたりける程に、夜の更けゆけば、風いと涼しう吹きつゝ、苦しき迄覺えければ、物のゆゑ知る友達の許に、「これのみぞかねて月見るらむ」とて、かゝる歌を詠みて遣しける。

歎きつつ空なる月を眺むれば涙ぞ天の川と流るゝ

さりける程に、いと深からぬ事なりければ、もとの官になりにけり。この友達どもは、躬恒、友則がほどなりけり。

第百七十一段

同じ男、知れる人の許に常に通ふに、いと憎さげなる女のあるを、女は成人になれば、こよなくなだらかに成るなれど、この女を憂しと笑ひけれど、見るたびにやうゝ好くなりもて行く。殊の外に生ひまさりして見えければ、

沼水に君はあらねどかかるものみるまみるまにおひ増りけり

女、このかへし、

かかるもの見るまみるまぞ疎まるる心あさまの沼に生ふれば

と返したりける。この男に女のいへりける。

いつはりをただすの森のゆふだすきかけてを誓へわれを思はば

女の思ふ男をして、たしかにいだすを見て、

あらはなる事あらがふな櫻ばな春は限と散るを見えつつ

かへし、

色に出であだに見ゆとも櫻花風の吹かずば散らじとぞ思ふ

第百七十二段

西の京五條わたりに、築地處々崩れて、草生ひ茂りて、さすがに所々蔀數多さゝげ渡したる所あり。簾の下に、女どもなど數多見えければ、この男なほも過ぎで、供なる童して、「などかく荒れたるぞ」と云ひ尋ねば、「誰がかくは宣ふぞ」と云ひければ、「大路行く人」といひけるに、崩より女ども數多出でて、かく云ひかけたりける。

人のあきに庭さへ荒れて道もなくよもぎ茂れる宿とやは見ぬ

といへりければ、童の口にいひ入れて、

誰が秋にあひて荒れたる宿ならむわれだに庭のくさは生さじ

さて時々通ひけれど、いかなる人の賺すならむと、つゝましかりければ、人にもそこそことも言はで通ふ程に、皆人、物へいにけり。只一人ありて、「もし人問はば、これを奉れ」とて、文書きて出しける。

我が宿はならの都ぞ男山越ゆばかりにはあらはさで訪へ

とありければ、この男いたく口惜しがりて、その家に置きたる者に、物などくれて問ひけれど、ふつと云はで只「奈良へ」とぞいひける。尋ねむ方なし。さる程に思ひ忘れにけるに、この男の親、初瀬に參りける供にありて、實さる事ありきかし。こゝやそならむかし、こやそれならむなど思ふ程に、供なる男どもなどに語らひなどしけり。さてかの初瀬に詣でて、三條より歸りけるに、飛鳥本といふ所に、相知れる法師も俗も數多出で來て、「けふ日はしたに成りぬ。奈良坂のあなたには、人の宿り給ふべき家も候はず、此處に泊らせ給へ」といひて、門竝に、家二つを一つに造り合せたる、をかしげなるにぞ留めける。さりければ留まりにけり。饗應など人々しければ、物など食ひて、騒しき程靜まり、程なく夕暮にはなりてけり。さりければ、戸の下に佇み出でて見るに、この南の家の北なる家にて、楢の木といふものをぞ二樹三樹植ゑたりける。「怪しく他木をも植ゑで」などいひて、さし覗きたりけるに、清げなる蔀どもあげ渡して、女ども數多居り。「怪し」などおのがうち言ひて、供なりける人を呼び寄せて、「この人はこの南に宿れるか」と問ひけり。築地の崩れより見し人は、いかに忘れざりけるにか、若し男などに具して來たるにやなど、蛛手に思ひ亂るゝ程に、悔しくも楢ぞとだにもいひてけるたまほこにだに來てもとはねば

といひけり。この「庭さへ荒れて」といひし人の手なりけり。京さへなま戀しき旅の程なりければ、硯こひ出でて、（以下、上田秋成の校訂本によりて補ふ。）

楢の木のならふ程とは教へねど名にやおふとて宿はかりつる

といひたりければ、「あなうちつけの事や」とて、かくぞ云ひ出したりける。

門過ぎて初瀬川まで渡る瀬も我が爲とや君はこたへむ

その夜とまりつ。翌朝、男、

朝まだき立つ空もなし白波のかへるかへるも歸りきぬべし

大和物語　終

堤中納言物語

花櫻折る少將

月にはかられて、夜深く起きにけるも、思ふらむ所いとほしけれど、立ち歸らむも遠き程なれば、漸う行くに、小家などに例音なふものも聞えず、隈なき月に、所々の花の木どもゝ、ひとへにまがひぬべく霞みたり。今少し過ぎて見つる所よりも、面白く過ぎ難き心地して、

そなたへと行きもやられず花櫻匂ふ木陰に立ち寄られつゝ

とうち誦じて、早くこゝに物言ひし人ありと思ひ出でゝ立ち休らふに、築地の崩れより、白き物の甚う咳きつゝ、出づめり。哀れげに荒れ、人氣なき處なれば、こゝかしこ覗けど答むる人なし。このありつる者をよびて、「此所に住み給ひし人は未だおはすや。『山人に物聞えむ』といふ人ありと、物せよ」といへば、「其の御方は此所にもおはしまさず。何とかいふ處になむ、住ませ給ふ」と聞えつれば、哀れの事や、尼などにやなりたるらむと後めたくて、「かのみつとほに逢はじや」など、微笑

みてのたまふ程に、妻戸をやはら揺放つ音すなり。男ども少しやりて、透垣の邊なる、群薄の繁き下に隠れて見れば、「少納言の君こそ開けやしぬらむ。出でゝ見給へ」といふ。よき程なる童の容態をかしげなる、甚う萎え過ぎて、宿直姿なる蘇芳にやあらむ、艶やかなる袙に、うちすきたる髪の裾、小袿に映えてなまめかし。月の明き方に、扇をさし隠して、「月と花とを」と口ずさみて、花の方へ歩み來るに、驚かさまほしけれど、暫し見れば、おとなしき人の「みつするはなどか今まで起きぬぞ。辨の君こそこゝなりつる、參り給へ」といふは物へ詣づるなるべし。ありつる童は留るなるべし。「侘しくこそ覺ゆれ。さばれ唯御供に參りて、近からむ所に居て御社へは參らじ」などいへば、「物狂ほしや」などいふ。皆仕立てゝ五六人ぞある。下るゝ程もいと惱ましげに、これぞ主なるらむと見ゆるをよく見れば、衣脱ぎかけたる容態、さゝやかにいみじうこめいたり。物言ひたるも、らうたきものゝ優々しく聞ゆ。嬉しくも見つるかなと思ふに、漸う明くれば歸り給ひぬ。

日さし上る程に起き給ひて、昨夜の所に文書き給ふ。「いみじう深う侍りつるも、道理なるべき御氣色に出で侍りぬるは、辛さもいかばかり」など、青き薄葉に柳につけて、

さらざりし古よりも青柳のいとどぞ今朝は思ひ亂るゝ

とて遣り給へり。返事めやすく見ゆ。

かけざりし方にぞ延へし絲なれば解くと見し間にまた亂れつゝ

とあるを見給ふ程に、源中將、兵衛佐、小弓持たせておはしたり。「昨夜は何所に隠れ給へりしぞ。内裏に御遊ありて召しゝかども、見つけ奉らでこそ」とのたまへば、「此所にこそ侍りしを、怪しかりける事かな」とのたまふ。花の木どもの咲き亂れたる、いと多く散るを見て、

飽かで散る花見る折はひたみちに

とあれば、佐、

我が身にかつは弱りにしかな

とのたまふ。中將の君、「さらば甲斐なくや」とて、

散る花を惜しみとめても君なくば誰にか見せむ宿の櫻を

とのたまふ。戯ぶれつゝ諸共に出づ。かの見つる處尋ねばやと思す。

夕方殿にまうで給ひて、暮れ行くほどの空、甚う霞みこめて、花のいと面白く散り亂るゝ夕映を、御簾卷き上げて眺め出で給へる御容貌、言はむ方なく光みちて、花の匂ひも、無下にけおさるゝ心地ぞする。琵琶を黄鐘調に調べて、いとのどやかにをかしゝ彈き給ふ御手つきなど、限なき女もかくはえあらじと見ゆ。この方の人々召し出でゝ、樣々うち合せつゝ遊び給ふ。みつする、「いかゞ女

のめで奉らざらむ。近衛の御門わたりにこそ、めでたく彈く人あれ。何事にもいと故づきてぞ見ゆる」と、おのがどち言ふを聞き給ひて、「いづれ、この櫻多くて荒れたる宿、童いかでか見し。我に聞かせよ」とのたまへば、「猶たよりありて、罷りたりしになむ」と申せば、「さる所は見しぞ。細に語れ」とのたまふ。かの見し童に物いふなりけり。「故源中納言の女になむ。實にをかしげにぞ侍るなる。かの御伯父の大將なむ、迎へて内に奉らむと申すなる」と申せば、「さらざらむ先に、猶たばかれ」とのたまふ。「さ思ひ侍れど、いかでか」とて立ちぬ。

夕さり、かの童はものいとよく言ふ者にて、ことよくかたらふ。「大將殿の常に煩はしく聞え給へば、人の御文傳ふる事だに、伯母上いみじくのたまふものを」と、同じ處にて、めでたからむ事などのたまふ頃、殊に責むれば、若き人の思ひやり少きにや、「善き折あらば今」といふ。御文は殊更に、氣色見せじとて傳へず。みつすゑ參りて、「言ひ趣けて侍る。今宵ぞよく侍るべき」と申せば、喜び給ひて少し夜更けておはす。みつすゑが車にておはしぬ。はるばるけしき見ありきて入れ奉りつ。火は物の後へ取りやりたればほのかなるに、母屋にいとちひさやかにてうつ臥し給へるを、搔抱きて乘せ奉り給ひて、車を急ぎてやるに、「こは何ぞ何ぞ」とて、心得ずあさましう思さる。中將の乳母聞き給ひて、「伯母上の後めたがり給ひて、臥し給へるになむ。もとより小くおはしけるを、老い給ひて、法師にさへなり給へば、頭寒くて、御衣を引き被きて臥し給へるなむ、それと覺えけるも道理なり」。車寄する程に古びたる聲にて、「いなや、こは誰ぞ」とのたまふ。その後いかゞ、をこがましうこそ、御容貌は限なかりけれど。

このついで

春の物とて詠めさせ給ふ畫つ方、臺盤所なる人々「宰相中將こそ參り給ふなれ。例の御にほひ、いと著く」など言ふ程に、突居給ひて、よべより殿に候ひし程に、やがて御使になむ、東の對の紅梅の下にうづませ給ひし薫物、今日の徒然に試みさせ給ふとてなむ」とて、えならぬ枝に、白銀の壺二つ附け給へり。中納言の君の、御帳の内に參らせ給ひて、御火取數多して、若き人々やがて試みさせ給ひて、少しさし覗かせ給ひて、御帳の側の御座に傍臥させ給へり。紅梅の織物の御衣に、たゝなはりたる御髮の裾ばかり見えたるに、これかれそこはかとなき物語、忍びやかにして誓し居給ふ。中將の君、この御火取の序に、あはれと思ひて、「人の語りしこそ、思ひ出でられ侍れ」と宣へば、おとなだつ宰相の君、「何事にか侍らむ。徒然に思しめされて侍るに、申させ給へ」とそゝのかせば、「さらば續い給はむとやする」とて、「ある君達に忍びて通ふ人やありけむ。いと美しき兒さ

へ出で來にければ、哀れと思ひ聞えながら、嚴しき片つ方やありけむ、絶間がちにてある程に、思ひも忘れず、いみじう慕ふがうつくしうて、時々は或所に渡しなどするをも、今なども言はでありしを、程經て立ち寄りたりしかば、いと寂しげにて、珍らしくや思ひけむ、かき撫でつゝ見居たりしを、え立ち留らね事ありて出づるを、ならひにければ、例のいたう慕ふがあはれに覺えて、暫し立ちとまりて、「さらばいざよ」とて、搦き抱きて出でけるを、いと心苦しげに見送りて、前なる一人を手まさぐりにして、

子だにかくあくがれ出でば薫物のひとりやいとど思ひこがれむ

と忍びやかに言ふを、屏風の後にて聞きて、いみじう哀れに覺えければ、兒もかへして、その儘になむゐられにし」と、「いかばかり哀れと思ふらむ」と、「おぼろげならじ」と言ひしかど、誰とも言はで、いみじく笑ひまぎらはしてこそ止みにしか。「いづら、今は中納言の君」とのたまへば、「あいなき事の序をも聞えさせてけるかな。あはれ只今の事は、聞えさせ侍りなむかし」とて、「去年の秋頃ばかりに、清水に籠りて侍りしに、傍に屏風ばかりを、ものはかなげに立てたる局の、にほひいとをかしう、人少なるけはひして、折々うち泣くけはひなどしつゝ行ふを、誰ならむと聞き侍りしに、明日出でなむとての夕つ方、風いと荒らかに吹きて、木の葉ほろほろと、谷のかたざまに崩れ色濃き紅葉など、局の前には隙なく散り敷きたるを、この中隔の屏風の邊に寄りて、こゝにもながめ侍りしかば、いみじう忍びやかに、

厭ふ身はつれなきものを憂き事を嵐に散れる木の葉なりけり

風の前なると聞ゆべき程にもなく、聞きつけて侍りしほどの、まことにいと哀れに覺え侍りながら、さすがにふと答へにくゝ、つゝましくてこそ止み侍りしか」と言へば、「いとさしも過し給はざりけむとこそ覺ゆれ。さても實ならば口惜しき御物つゝみなりや。いづら少將の君」とのたまへば、「賢しう物も聞えざりつるを」と言ひながら「伯母なる人の、東山わたりに行ひて侍りしに、暫し慕ひて侍りしかば、主人の尼君の方に痛う口惜しからぬ人々のけはひ、數多し侍りしを紛らはして人に忍ぶにやと見え侍りしも、隔てのけはひのいと氣高う唯人とは覺え侍らざりしに、ゆかしうて、物はかなき障子の紙の彼方へ出でゝ、覗き侍りしかば、簾に几帳そへて、清げなる法師二三人ばかり、總ていみじくをかしげなりし人、几帳のつらに添ひ臥して、この居たる法師近くよびて物いふ。何事ならむと聞き分くべき程にもあらねど、尼にならむと語らふ氣色にやと見ゆるに、法師やすらふ氣色なれど、なほなほ切に言ふめれば、さらばとて、几帳のほころびより、櫛の笥の蓋に、長に一尺ばかり餘りたるにやと見ゆる、髪の筋、すそつきいみじううつくしきを、わげ入れて押し出す。

傍に今少し若やかなる人の、十四五ばかりにやとぞ見ゆる、髪たけに四五寸ばかり餘りて見ゆる、薄色のこまやかなる一襲、掻練などひき重ねて、顔に袖をおしあて、いみじう泣く。弟なるべしとぞ推し量られ侍りし。又若き人々二三人ばかり、薄色の裳ひきかけつゝ居たるも、いみじうせきあへぬ氣色なり。乳母だつ人などはなきにやと哀れに覺え侍りて、扇の端にいと小さく、

おぼつかなうき世背くは誰とだに知らずながらも濡るゝ袖かな

と書きて、幼き人の侍ひして遣りて侍りしかば、この弟にやと見えつる人ぞ書くめる。さて取らせたれば持て來たり。書樣ゆゑゆゑしう、をかしかりしを見しにこそ、くやしうなりて」など言ふ程に、うへ渡らせ給ふ御氣色なれば、紛れて少將の君も隱れにけりとぞ。

蟲めづる姫君

蝶愛づる姫君の住み給ふ傍に、按察使の大納言の御女、心にくゝなべてならぬさまに、親たちかしづき給ふ事限なし。この姫君ののたまふ事「人々の花や蝶やと賞づるこそ、はかなうあやしけれ。人は實あり、本地尋ねたるこそ、心ばへをかしけれ」とて萬蟲の恐ろしげなるを取り集めて、これが成らむさまを見むとて、樣々なる籠・箱どもに入れさせ給ふ。中にも鳥毛蟲の、心深きさましたるこそ心にくけれとて、明暮は耳挾みをして、手のうちにそへ伏せて目守り給ふ。若き人々は怖ぢ惑ひければ、男の童の物怖ぢせず、いふかひなきを召し寄せて、箱の蟲ども取らせ、名を問ひ聞き、今新しきには名をつけて興じ給ふ。人はすべてつくろふ所あるは惡しとて、眉更に拔き給はず、齒黑更にうるさし、きたなしとてつけ給はず、いと白らかに笑みつゝ、この蟲どもを朝夕に愛し給ふ。人々怖ぢわびて逃ぐれば、その御方は、いと怪しくなむ詈りける。かく怖づる人をば、「けしからず放俗なり」とていと眉黑にてなむ睨み給ひけるに、いとゞ心地なむ惑ひける。親たちはいと怪しく、さまことにおはすることそと思しけれど、思し取りたる事ぞあらむや、怪しき事ぞと思ひて、聞ゆる事は深くさはらへ給へば、いとぞかしこきやと、これをもいと恥しと思したり。「さはありとも、音聞あやしや。人はみめをかしき事をこそ好むなれ。むくつけゞなる鳥毛蟲を興ずなると、世の人の聞かむも、いと怪し」と聞え給えば、「苦しからず。萬の事どもを尋ねて、末を見れば、こそ事はゆゑあれ。いと幼き事なり。鳥毛蟲の蝶とはなるなり」。そのさまになり出づるを取り出でゝ見せ給へり。「衣とて人の著るも、蠶のまだ羽つかぬにしいだし、蝶になりぬれば、いとも袖にて、あだになりぬるをや」との給ふに、言ひ返すべうもあらずあさまし。さすがに親たちにさし向ひ給はず、「鬼と女とは、人に見えぬぞよき」と案じ給へり。母屋の簾を少し卷き上げて、几帳そへ

て立てゝ、かく賢しく言ひいだし給ふなりけり。これを若き人々聞きて、「いみじくさかし給へど、心地こそ惑へ、この御遊び物よ、いかなる人、蝶めづる姫君につかまつらむ」とて、兵衛といふ人、

いかで我とがむかたなくいでしがな鳥毛蟲ながら見るわざはせし

と言へば小大夫といふ人笑ひて、

うらやまし花や蝶やといふめれど鳥毛蟲臭き世をも見るかな

など言ひて笑へば、「からしや。眉はしも鳥毛蟲だちためり。さてはぐきこそ皮のむけたるにやあらむ」とて左近といふ人、

冬くれば衣たのもし寒くともかはむし多く見ゆるあたりは

衣など著ずとも、あらむかし」など言ひあへるを、とがとがしき女聞きて、「若人達は何事言ひおはさうずるぞ。蝶愛で給ふなる人専らめでたうも覺えず。けしからずこそ覺ゆれ。さて又鳥毛蟲竝べ、蝶といふ人ありなむやは。唯それが脱くるぞかし。その程を尋ねてし給ふぞかし。それこそ心深けれ。蝶は捕ふれば手にきりつきて、いとむづかしきものぞかし。又蝶は捕ふれば、瘧病せさすなり。あなゆゝし」と言ふにいとゞ憎さ増りて言ひあへり。この蟲ども捕ふる童にはをかしき物、彼がほしがる物を賜へば、様々に恐しげなる蟲どもを取り集めて奉る。鳥毛蟲は毛などはをかしげなれど、覺えねばさうざうしとて、蟷螂、蝸牛などを取り集めて、歌ひのゝしらせて聞かせ給ひて、我も聲をあげて「蝸牛の角の爭ふや」なぞといふ事を誦じ給ふ。童の名は例のやうなるは侘しとて蟲の名をなむつけ給ひたりける。けらを、ひきまろ、いなかだち、いなごまろ、あまひこ、なむなどつけて召使ひ給ひける。かゝる事世に聞えて、いとうたてある事をいふ中に、ある上達部の御聟、うちはやりて物怖ぢせず、愛敬つきたるあり。この姫君の事を聞きて「さりともこれには恐ぢなむ」とて帶の端のいとをかしげなるに、蛇の形をいみじく似せて、動くべきさまなどしつけて、鱗だちたる懸袋に入れて、結び附けたる文を見れば、

はふはふも君があたりに從はむ長き心の限なき身は

とあるを、何心なく御前に持て參りて、「袋などあくるだに怪しく重たきかな」とて、ひきあけたれば、蛇首をもたげたり。人々心惑はして詈るに、君はいと長閑にて、「なもあみだぶつ、なもあみだぶつ」とて、「生前の親ならむ、な騒ぎそ」とうちわなゝかし、顔ほかやうに、「なまめかしきうちしも、結緣に思はむぞ、怪しき心なるや」とうち呟きて、近く引寄せ給ふも、流石に恐ろしく覺え給ひければ、立處居處蝶の如く、蟬聲にのたまふ聲の、いみじうをかしければ、人々逃げ騒ぎて笑ひ入れば、しかじかと聞ゆ。「いとあさましく、むくつけき事をも聞くわざかな。さる物のあるを見る

見る、皆立ちぬらむ事ぞ怪しきや」とて大殿太刀を提げもて走りたり。よく見給へばいみじうよく似せて作り給へりければ、手に取り持らて、「いみじう物よくしける人哉と、かしこがり譽め給ふと聞きてしたるなめり。返事をして、早く遣り給ひてよ」とて渡り給ひぬ。人々作りたると聞きて、「けしからぬわざしける人かな」と言ひ憎み、「返事せずば覺束なかりなむ」とて、いと硬くすくよかなる紙に書き給ふ。假字はまだ書き給はざりければ、片假字に、

契あらばよき極樂に行きあはむまつはれにくし蟲の姿は

福地の園に」とある。右馬の助見給ひて、いと珍らかに、さま殊なる文かなと思ひて、いかで見てしがなと思ひて、中將と言ひ合せて、怪しき女どもの姿を作りて、按察使の大納言の出で給へる程におはして、姫君の住み給ふ方の、北面の立蔀のもとにて見給へば、男の童の、異なることなき草木どもに佇みありきて、さて言ふやうは、「この木にすべていくらもありくは、いとをかしきものかな。これ御覽ぜよ」とて、簾を引き上げて、「いと面白き鳥毛蟲こそ候へ」といへば、さかしき聲にて、「いと興ある事かな。此方持て來」とのたまへば、「取り別つべくも侍らず。唯こゝもとにて御覽ぜよ」と言へば、荒らかに踏みて出づ。簾を押しはりて、枝を見はり給ふを見れば、頭へ衣著あげて、髪も下り端清げにはあれど梳りつくろはねばにや、しぶげに見ゆるを、眉いと黔く花々とあざやかに、涼しげに見えたり。口つきも愛敬づきて清げなれど、齒黑つけねばいとよづかず、化粧したらば清げにはありぬべし、心憂くもあるかなと覺ゆ。かくまで寢したれど見にくゝなどはあらで、いとさまことに、鮮かに氣高く、花やかなる樣ぞあたらしき。練色の綾の袿一襲、はたおりめの小袿一襲、白き袴を好みて著給へり。この蟲をいとよく見むと思ひて、さし出でゝ、「あなめでたや。日にあぶらるるが苦しければ、此方ざまに來るなり。これを一つもおとさで、追ひおこせよ童」と宣へば、突きおとせば、はらはらと落つ。白き扇の墨ぐろに、眞字の手習したるをさし出でゝ、「これに拾ひ入れよ」とのたまへば童取りいづる。みな君達もあさましう、災難あるわたりに、こよなくもあるかなと思ひて、この人を思ひて、いみじと君は見給ふ。童の、立てる怪しと見て、「かの立蔀のもとに添ひて、清げなる男のさすがに姿つき怪しげなるこそ、覗き立てれ」と言へば、この大夫の君といふ「あないみじ。御前には例の蟲興じ給ふとて、あらはにやおはすらむ。告げ奉らむ」とて參れば、例の簾の外におはして、鳥毛蟲のゝしりて、拂ひおとさせ給ふ。いと恐ろしければ近くは寄らで、「入らせ給へかし。あらはなり」と聞えさすれば、これを制せむと思ひて言ふと覺えて、「それさばれ、物恥しからず」とのたまへば、「あな心憂、虚言とおぼしめすか。立蔀の邊に、いと恥しげなる人侍るなるを、奥にて御覽ぜよ」といへば、「けらを、彼處に出で見て」とのたまへば、

立ち走りていきて、實に侍るなりけり」と申せば、立ち走り、鳥毛蟲は拾ひ入れて、走り入り給ひぬ。丈だちよき程に、髪も桂ばかりにていと多かり。すそもそがねば、ふさやかならねど、とゝのほりて、なかなか美しげなり。かくまであらぬも、世の常の人ざまけはひもてつけぬるは、口惜しうやはある。實に疎ましかるべきさまなれど、いと清げに氣高う、煩はしきけぞ異なるべき。あなロ惜し。などかいとむくつけき心ならむ、かばかりなるさまをとおぼす。右馬の助、唯歸らむはいとさうざうし、見けりとだに知らせむとて、墨紙に草の汁して、

かはむしの毛深きさまを見つるよりとりもちてのみ守るべきかな

とて扇して打ち叩き給へば、童出で來たり。「これ奉れ」とて取らすれば、大夫の君といふ人、「このかしこに立ち給へる人の御前に奉れとて」と言へば、取りて、「あないみじ。右馬の助のしわざにこそあめれ。心憂げなる蟲をしも興じ給へる御顏を見給ひつらむよ」とて樣々聞ゆれば、答へ給ふ事は、「思ひとけば物なむ恥しからぬ。人は夢幻のやうなる世に、誰かとまりて惡しき事をも見、善き事をも見給ふべき」とのたまへば、言ふかひなくて、若き人々、おのがじゝ心憂がりあへり。この人々、返事やはあるとて、暫し立ち給へれど童をも皆呼び入れて、「心憂し」と言ひあへり。或人々は、心づきたるもあるべし。さすがにいとほしとて、

人に似ぬ心のうちは鳥毛蟲の名を問ひてこそ言はまほしけれ

右馬の助

鳥毛蟲にまぎるゝ眉の毛の末にあたるばかりの人はなきかな

と言ひわびて歸りぬめり。二の卷にあるべし。

ほどほどの懸想

祭の頃は、なべて今めかしう見ゆるにやあらむ。賤しき小家の半蔀も、葵などかざして心地よげなり。童の袖袴清げに著て、さまざまの物忌ども附け化粧して、我も劣らじと挑みたる氣色どもにて、行き違ふはをかしく見ゆるを、ましてその際の小舍人隨身などは、殊に思ひ咎むるも道理なり。とりどりに思ひわけつゝ物言ひ戯るゝも、何ばかりはかばかしき事ならじかしと數多見ゆる中に、いづくのにかあらむ、薄色著たる髪はきはりある、頭つき容態などもいとをかしげなるを、頭の中將の御小舍人童思ふさまなりと見て、いみじくなりたる梅の枝に、葵をかざして取らすとて、

梅が香に深くぞたのむおしなべてかざす葵のねも見てしがな

といへば、

しめの中の葵にかゝる木綿鬘くれど寢がたきものと知らなむ

と、おし放いて言ふもざれたり。「あな聞きにくや」とて笏しく走り打ちたれば、「そよ、そのなげきの森のもどかしければぞかし」などほどほどにつけては、互に痛しなど思ふべかめり。その後常に行き逢ひつゝも語らふ。如何になりにけむ、亡せ給ひにし式部卿の宮の姫君の中になむ候ひける。宮など疾くかくれ給ひにしかば、心細く思ひ歎きつゝ、下京邊に人ずくなにて過し給ふ。上は宮の亡せ給ひける折、樣變へ給ひにけり。姫君の御容貌、例の事と言ひながら、なべてならずねびまさり給へば、いかにせまし、內裏などに思し定めたりしを、今は甲斐なくなど思し歎くべし。この童來つゝ見るごとに、たのもしげなく、宮の內も寂しく凄げなる氣色を見て語らふ。「まろが君を、この宮に通はし奉らばや。まだ定めたる方もなくておはしますに、如何によからむ。程遙になれば、思ふまゝにも參らねば、おろかなるとも思すらむ。又いかにと後めたき心地も添へて、樣々安げなきを」といへば、「更に今は左樣の事もおぼし給はずとこそ聞け」といふ。「御容貌めでたくおはしますらむや。いみじき御子たちなりとも、飽かぬ所おはしまさむはいと口惜しからむ」といへば、「あなあさまし、いかでか。見奉らむ人々のたまふは、萬むづかしきも、御前にだに參れば、慰みぬべしとこそのたまへ」と語らひて明けぬれば去ぬ。かくといふ程に年もかへりにけり。君の御方に若くて侍ふ男、好ましきにやあらむ、定めたる所もなくて、この童にいふ、「その通ふらむ所はいづくぞ。さりぬべからむや」といへば、「八條の宮になむ、知りたる者候ふなれども、殊に若人數多候ふまじ。唯中將侍從の君などいふなむ容貌もよげなりと聞き侍る」といふ。「さらばそのしるべして傳へさせよ」とて文とらすれば、「はかなの御懸想かな」と言ひて、持ていきて取らすれば、「あやしの事や」と言ひて、もてのぼりて、しかじかの人とて見す。手も清げなり。柳につけて、

したにのみ思ひ亂るゝ青柳のかたよる風はほのめかさずや

知らずばいかに」とある。「御返事なからむは、いとふるめかしからむ。今樣は、なかなか初のをぞし給ふなる」などぞ、笑ひてもどかす。少し今めかしき人にや、

一筋に思ひもよらぬ青柳は風につけつゝさぞ亂るらむ

今樣の手の、かどあるに書き亂りたれば、をかしと思ふにや、守りて居たるを、君見給ひて、後より俄に奪ひ取り給へる。「誰がぞ」とつみひねり問ひ給へり。「しかじかの人の許になむ。等閑にや侍る」と聞ゆ。我もいかで、さるべからむ便もがなと思すあたりなれば、日とまりて見ゆ。「同じくは懇に言ひおもむけよ。物のたよりにも契らむ」などのたまふ。童を召して、有樣くはしく問はせ給ふ。ありの儘に、心細げなる有樣を語らひ聞ゆれば、あはれ故宮のおはせましかば、さるべき折

は參でつゝ見しにも、萬思ひ合せられ給ひて、「世の常は」など獨りごたれ給ふ。我が御うへも、儚く思ひ續けられ給ふ。いとゞ世もあぢきなく覺え給へど、又いかなる心の亂れにかあらむとのみ、常に催し給ひつゝ、歌など詠みて問はせ給ふべし。いかで言ひつきしなど思しけるとかや。

逢坂越えぬ權中納言

皐月待ちつけたる花橘の香も、昔の人戀しう、秋の夕に劣らぬ風にうち匂ひたるは、をかしうもあはれにも思ひ知らるゝを、山郭公も里馴れて語らふに、三日月の影ほのかなるは、折から忍び難くて、例の宮わたりに訪はまほしう思さるれど、甲斐あらじとうち歎かれて、或わたりの猶情あまりなるまでと思せど、そなたは物憂きなるべし。いかにせむと眺め給ふ程に、「内裏に御遊始るを只今參らせ給へ」とて藏人の少將參り給へり。「待たせ給ふを」などそゝのかし聞ゆれば、物憂ながら「車さし寄せ」などのたまふを、少將「いみじうふさはぬ御氣色のさぶらふは、たのめさせ給へる方の恨み申すべきにや」と聞ゆれば、「かばかり怪しき身を、恨しきまで思ふ人は誰か」など言ひかはして參り給ひぬ。琴笛など取り散らして、調べまうけて待たせ給ふなりけり。ほどなき月も雲がくれぬるを、星の光に遊ばせ給ふ。この方つきなき殿上人なぞは、眠たげにうち欠伸つゝ、すさまじげなるぞわりなき。

御遊果てゝ、中納言、中宮の御方にさし覗き給ひつれば、若き人々心地よげにうち笑ひつゝ、「いみじき方人參らせ給へり。あれをこそ」など言へば、「何事せさせ給ふぞ」と宣へば、「明後日根合侍りしを、何方にかよからむと思し召す」と聞ゆれば、「あやめも知らぬ身なれども、引きとり給はむ方にこそは」とのたまへば、「あやめも知らせ給はざなれば、右には不用にこそは。さらば此方に」とて、小宰相の君、押し取り聞えさせつれば、「御心もよるにや、かう仰せらるゝ折も侍りけるは」とて、憎からずうち笑ひて出で給ひぬるを、例のつきなき御氣色こそ侘しけれ。かゝる折は、うちも亂れ給へかしとぞ見ゆる。右の人、「さらばこなたには三位の中將を寄せ奉らむ」と言ひて、殿上に呼びにやり聞えて、「かゝる事の侍るを、こなたに寄らせ給へと、賴み聞ゆる」と聞えさすれば、「事にも侍りぬ。心の及ばむ限こそは」と賴もしうのたまふを、「さればこそ、この御心は、底ひ知らぬこひぢにもおりたち給ひなむ」と互に羨むも、宮はをかしう聞かせ給ふ。中納言、さこそ心にいらぬ氣色なりしかど、その日になりて、えも言はぬ根ども引き具して參り給へり。小宰相の局にまづおはして、「心幼く取り寄せ給ひしが心苦しさに、若々しき心地すれど、淺香の沼を尋ねて侍り。さりとも、負け給はじ」とあるぞ賴もしき。何時の間に思ひよりける事にか、言ひ過すべくもあら

ず。「右の中將おはしたんなり。いづこや、いたう暮れぬ程ぞよからむ。中納言は未だ參らせ給はぬにや」と、まだきに挑ましげなるを、少將の君「あなをこがまし。御前こそ、御聲のみ高くて、遲かめれ。彼は東雲より入り居て、整へさせ給ふめり」など言ふ程にぞ、かたちより始めて同じ人とも見えず、恥しげにて「などゝよ、この翁な痛う挑み給ひそ。身も苦し」とて歩み出で給へる、御年の程ぞ廿に一つ二つばかり餘り給ふらむ。「さらば疾くし給へかし。見侍らむ」とて人々參り集ひたり。方人の殿上人、心々に取りいづる根の有樣、何れも何れも劣らず見ゆる中にも、左のは、猶なまめかしきけさへ添ひてぞ、中納言のし出で給へる。合せもて行く程に、持にやならむと見ゆるを、左の終に取り出でられたる根ども、更に心及ぶべうもあらず。三位中將、いはむ方なく守り居給へり。左勝ちぬるなめりと、方人の氣色得意顏に心地よげなり。

根合はてゝ歌の折になりぬ。左の講師左中辨、右のは四位の少將讀み上ぐる程、宰相の君などいかに心盡すらむと見えたり。四位少將いかに臆すやと、あいなう、中納言後見給ふ程ねたげなり。

左

君が代の長きためしに菖蒲草千尋に餘る根をぞひきつる

右

なべてのと誰か見るべき菖蒲草淺香の沼の根にこそありけれ

とのたまへば、少將更に劣らじものをとて、

何れともいかゞわくべき菖蒲草同じ淀野に生ふる根なれば

と宣ふ程に、上聞かせ給ひて、ゆかしう思召されれば、忍びやかにて渡らせ給へり。宮の御覽ずる所に寄らせ給ひて、「をかしき事の侍りけるを、などか告げさせ給はざりける。中納言三位など方わかるゝは戯ぶれにはあらざりける事にこそは」と宣はすれば、「心による方のあるにや、別くとはなけれど、さすがに挑ましげにぞ」など聞えさせ給ふ。「小宰相、中將が氣色こそいみじかめれ。何れ勝ち負けたる。さりとも中納言は負けじ」など仰せらるゝや仄聞ゆらむ。少將、御簾の中怨めしげに見やりたる尻目も、らららうしく愛敬づき、人より殊に見ゆれど、なまめかしう恥しげなるは猶類なげなり。「無下にかくて止みなむも、名殘つれづれなるべきを、琵琶の音こそ戀しき程になりたれ」と中納言、辨をそゝのかし給へば、「その事となき暇なさに、皆忘れにて侍るものを」といへど、遁るべうもあらず宣へば、盤涉調に搔い調べて、はやりかに搔き鳴らしたるを、中納言絶えずをかしうや思さるらむ、和琴とり寄せて彈き合せ給へり。この世の事とも聞えず。三位横笛、四位少將拍子取りて、藏人の少將伊勢の海うたひ給ふ。聲まぎれず美し。上は樣々面白く聞かせ給ふ中

にも、中納言は、かくうち解け、心に入れて彈き給へる折は少きを珍しう思しめす。「明日は御物忌なれば、夜更けぬさきに」とて歸らせ給ふとて、左の根の中に、殊に長きを、ためしにもとて持たせ給へり。中納言まかで給ふとて、「階の下の薔薇」とうち誦じ給へるを、若き人々は飽かず慕ひぬべくめで聞ゆ。かの宮わたりにも、覺束なき程になりにけるをと、訪はまほしう覺せど、いたう更けぬらむとて、うち臥し給へれどまどろまれず。「人は物をや」とぞ言はれ給ひける。又の日、菖蒲も引き過ぎぬれど、名殘にや、菖蒲の紙あまた引き重ねて、

昨日こそひき侘びにしか菖蒲草深きこひぢにおり立ちし間に

と聞え給ひつれど、例の甲斐なきを思し歎く程に、はかなく皐月も過ぎぬ。地さへ割れて照る日にも、袖ほす夜なく思しくづほるゝ。十日宵の月隈なきに、宮にいと忍びておはしたり。宰相の君に消息し給ひつれば、恥しげなる御有樣に、いかで聞えさせむ」といへど、「さりとて物の程知らぬやうにや」とて妻戸押し開け對面したり。うち匂ひ給へるに、よそながらうつる心地ぞする。なまめかしう心深げに聞え續け給ふ事どもは「奥の夷も思ひ知りぬべし。例の甲斐なくとも、かく聞きつとばかりの御言の葉をだに」と責め給へば、「いさや」と打ち歎きて入るに、やをら續きて入りぬ。臥し給へる所にさし寄りて、「時々は端つ方にても涼ませ給へかし。餘りうもれ居たるも」とて、「例の理なき事こそ、えも言ひ知らぬ御氣色、常よりもいとほしうこそ見奉り侍れ。唯一言聞え知らせまほしくてなむ。野にも山にもと卿たせ給ふこそ、わりなく侍る」と聞ゆれば、「いかなるにか、心地の例ならず覺ゆる」と宣ふ。「いかゞ」と聞ゆれば、「例は宮に教ふるとて、動き給ふべうもあらねば、かくなむ聞えむ」とて立ちぬるを、聲をしるべにて尋ねおはしたり。思し惑ひたる樣心苦しければ、「身の程知らず、無禮にはよも御覽ぜられじ。唯一言を」と言ひもやらず、涙のこぼるゝさまぞ、さまよき人もなかりける。宰相の君、出で見れど人もなし。返事聞きてこそ出で思はめ、人に物宣ふなめりと思ひて、暫し待ち聞ゆるに、おはせずなりぬれば、なかなか甲斐なき事は聞かじなど思して、出で給ひにけるなめり。いとほしかりつる御氣色を、我ならばやと思ふらむ、あぢきなく打ち詠めて、うちをば思ひよらぬぞ心後れたりける。宮は流石に理なく見え給ふものから、心强くて明け行く氣色を、中納言も、えぞ荒立ち給はざりける。心の程も思し知れとにや、侘しと思したるを、立ち出で給ふべき心地せねど、見る人あらば、事あり顔にこそはと、人の御爲いとほしくて、「今より後だに思し知らず顔ならば、心憂くなむ。猶辛からむとや思しめす。人はかくしも思ひ侍らじ」とて、

怨むべきかたこそなけれ夏衣薄き隔てのつれなきやなぞ

かひあはせ

九月の有明の月に誘はれて、藏人の少將、指貫つきづきしく引き上げて、唯一人小舍人童ばかり具して、やがて朝霧もよく立ち隱しつべく、隙なげなるに、をかしからむ所の、開きたらむもがなと言ひて歩み行くに、木立をかしき家に、琴の聲ほのかに聞ゆるに、いみじう嬉しくなりて、園る門の側など、崩れやあると見けれど、いみじく築地など全きに、なかなか侘しく、いかなる人のかく彈き居たるならむとわりなくゆかしけれど、すべきかたも覺えで、例の聲出させて、隨身に詠はせ給ふ。

行く方も忘るゝばかり朝ぼらけひきとどむめる琴の聲かな

とうたはせて、「まことに暫し、内より人やと、心ときめきし給へど、さもあらねば、口惜しくて歩み過ぎたれば、いと好ましげなる童四五人ばかり走り違ひ、小舍人童男など、をかしげなる小箱やうの物を捧げ、をかしき文、袖の上にうち置きて出で入る家あり。何わざするならむとゆかしくて、人目見はかりて、やをらはひりて、いみじく繁き薄の中に立てるに、八つ九つばかりなる女子のいとをかしげなる、薄色の袙紅梅などみだれ著たる、小き貝を瑠璃の壺に入れて、あなたより走る樣の慌しげなるを、をかしと見給ふに、直衣の袖を見て、「こゝに人こそあれ」と何心もなく言ふに、侘しくなりて、「あなかま。聞ゆべき事ありて、いと忍びて參り來たる人ぞ。そと寄り給へ」といへば、「明日の事思ひ侍るに、今より暇なくて、そゝき侍るぞ」と囀りかけて、去ぬべく見ゆめり。をかしければ、「何事のさ忙しくは思さるゝぞ。麿をだに思さむとあらば、いみじうをかしき事も加へてむかし」と言へば、名殘なく立ち止りて、「この姫君と上との御方の姫君と、貝合せさせ給はむとて、月頃いみじく集めさせ給ふに、彼方の御方は大夫の君・侍從の君と、貝合せさせ給はむとて、いみじく求めさせ給ふなり。麿が御前は、唯若君一ところにて、いみじく理なく覺ゆれば、只今も姉君の御許に人遣らむとて、罷りなむ」と言へば、「その姫君達のうち解け給ひたらむ、格子の間などにて見せ給へ」といへば、「人に語り給はゞ、母もこそ宣へ」とおづれば、「物ぐるほし、麿は更に物言はぬ人ぞよ。唯人に勝たせ奉らむ勝たせ奉らじは心ぞよ。いかなるにか、ひとものけ近く」と宣へば、萬覺えで、「さらば歸り給ふなよ。隱れ作りて据ゑ奉らむ。人の起きぬ前にいざ給へ」とて、西の妻戸に屏風押し疊み寄せたる所にする置くを、ひがひがしく漸うなり行くを、幼き子を賴みて見も付けられたらば、よしなかるべきわざぞかしなど、思ひ思ひ、間より覗けば、十四五ばかりの子ども見えて、いと若くきびはなる限り、十二三ばかりありつる童のやうなる子どもなどし

て、殊に小箱に入れ、物の蓋に入れなどして、持ち違ひ騒ぐ中に、母屋の簾に添へて立てたる、几帳の端うち上げて、さし出でたる人、僅十三許りにやと見えて、額髪のかゝりたる程より始めて、この世のものとも見えず美しきに、萩襲の織物の袿、紫菀色など押し重ねたる、頬杖をつきて、いと物悲しげなる、何事ならむと、心苦しと見れば、十ばかりなる男に、朽葉の狩衣、二藍の指貫、しどけなく著たる、同じやうなる童に、硯の箱よりは見劣りなる、紫檀の箱のいとをかしげなるに、えならぬ貝どもを入れて持て寄る。見する儘に思ひよらぬ隈なくこそ。「承香殿の御方などに参り聞えさせつれば、是をぞ求め得て侍りつれと、侍従の君の語り侍りつるは。大夫の君は、藤壷の御方より、いみじく多く賜はりにけり。すべて殘る隈なくいみじげなるを、いかにせさせ給はむずらむと、道の儘も思ひまうで來つる」とて顔もつと赤くなりて言ひ居たるに、いとゞ姫君も心細くなりて、「ながなかなる事を言ひ始めてけるかな。いとかくは思はざりしを、ことごとしくこそ求め給ふなれ」と宣ふに、「などか求め給ふまじき。上は内大臣殿のうへの御許までぞ乞ひ奉り給ふとこそはいひしか。これにつけても、母のおはせましかば、あはれかくは」とて涙も落しつべき氣色ども、をかしと見る程に、このありつる童、「東の御方渡らせ給ふ。それ隱させ給へ」と言へば、塗り籠めたる所に、皆取り置きつれば、つれなくて居たるに、初の君よりは、少しおとなびてやと見ゆる人、

山吹・紅梅・薄朽葉、あはひよからずふくだみて、髪いと美しげにて、丈に少し足らぬなるべし。こよなく後れたると見ゆ。「若君の持ておはしつらむは、など見えぬ。かねて求めなどはすまじと、たゆめ給ふにすかされ奉りて、萬はつゆこそ求め侍らずなりにけれど、いと悔しく、少しさりぬべからむものは、分け取らせ給へ」など言ふさま、いみじく得意顔なるに、憎くなりて、いかでこなたを勝たせてしがなと、そゞろに思ひたりぬ。この君「こゝにも外までは求め侍らぬものを我が君は何をかは」と答へて、居たるさま美し。うち見まはして渡りぬ。このありつるやうなる童、三四人ばかりつれて、「我が母の常に讀み給ひし觀音經、我が御前負けさせ奉り給ふな」と、唯この居たる戸のもとにしも向きて、念じあへる顔をかしけれど、ありつる童や、言ひ出でむと思ひ居たるに、立ち走りてあなたに去ぬ。いと細き聲にて、

かひなしとなに歎くらむ白浪も君がかたには心寄せてむ

と言ひたるを、さすがに耳疾く聞きつけて、「今かたへに聞き給ひつや。これは誰が言ふべきぞ。觀音の出で給ひたるなり。嬉しのわざや。姫君のお前に聞えむ」と言ひて、さ言ひがてら恐しくやありけむ、つれて走り入りぬ。ようなき事を言ひて、このわたりやを見顯さむと、胸つぶれてさすがに思ひ居たれど、唯いと慌しく「かうかう念じつれば、佛のたまへる」と語れば、いと嬉しと思

ひたる聲にて、「實かはとよ、恐しきまでこそ覺ゆれ」とて、頰杖つき止みて、うち赤みたるまみ、いみじく美しげなり。「いかにぞ、この組入の上よりふと物の落ちたらば、まことの佛の御功德とこそは思はめ」など言ひあへる、をかし。疾く歸りて、いかでこれを勝たせばやと思へど、晝は出づべき方もなければ、すゞろに能く見暮して、夕霧に立ち隱れて出でゝぞ、えならぬ洲濱の三つばかりなるを、空に作りて、いみじき小箱をするて、色々の貝をいみじく多く入れて、上には黃金白銀の蛤、虛貝などを隙なく蒔かせ、手はいと小くて

白浪に心を寄せて立ちよらばかひなきならぬ心寄せなむ

とて、ひき結びつけて、例の隨身に持たせて、まだ曉に、門の邊を佇めば、昨日の子しも走る。嬉しくて、「かうぞばかり聞えねよ」とて懷よりをかしき小箱を取らせて、「誰がともなくてさし置かせて來給へよ。さて今日の有樣を見せ給へよ。さらば又々も」と言へば、いみじく喜びて、「唯ありし戸口、そこはまして、今日は人もやあらじ」とて入りぬ。洲濱、南の高欄に置かせて這入りぬ。やをら見通し給へば、唯同じ程なる若き人ども、二十人ばかりに裝束きて、格子上げそゝくめり。この洲濱を見つけて、あやしく「誰がしたるぞ、誰がしたるぞ」といへば「さるべき人こそなけれ。思ひえつ。この昨日の佛のし給へるなめり。あはれにおはしけるかな」と喜び騷ぐ樣の、いと物ぐるほしければ、いとをかしくて見居給へりとや。

思はぬかたにとまりする少將

昔物語などにぞ、かやうの事は聞ゆるを、いと有難きまで、あはれに淺からぬ御契の程見えし御事を、つくづくと思ひ續くれば、年の積りにける程も、哀に思ひ知られけむ。大納言の姫君二人ものし給ひし、實に物語に書きつけたる有樣に劣るまじく、何事につけても生ひ出で給ひしに、故大納言も母上も、うち續き薨れ給ひにしかば、いと心細き故鄕に、詠め過し給ひしかど、はかばかしく御乳母だつ人もなし。唯常に侍ふ侍從・辨などいふ若き人々のみ侍へば、年に添へて、人目稀にのみなりゆく故鄕にいと心細くておはせしに、右大將の御子の少將、知るよしありて、いと切に聞えわたり給ひしかど、かやうの筋はかけても思しよらぬ事にて、御返事など思しかけざりしに、少納言の君とて、いといたう色めきたる若き人、何の便もなく、二所大殿籠りたる處へ、導き聞えてけり。もとより御志ありける事にて、姫君をかき抱きて、御帳の內へ入り給ひにけり。思し呆れたる樣、例の事なれば書かず。おしはかり給ふにしもすぎて、あはれに思さるれば、うち忍びつゝ通ひ給ふを、父殿聞き給ひて、「人の程など、口惜しかるべきにはあらねど、何かはいと心細き所に」な

ど許しなく宣へば、思ふ程にもおはせず。君も暫しこそ忍び過し給ひしか、さすがにさのみはいかがおはせむ。さるべきに思し慰めて、漸うちうち靡き給へる様、いとゞらうたく哀なり。畫など自ら寢過し給ふ折、見奉り給ふに、いと貴にらうたく、うち見るより心苦しき様し給へり。何事もいと心憂く、人目稀なる御住居に、人の御心もいと頼み難く、いつまでとのみ詠められ給ふに、四五日いぶせくて積りぬるを、思ひし事かなと心細きに、御袖たゞならぬを、我ながらいつ習ひけるぞと思ひ知られ給ふ。

人心秋のしるしの悲しきにかれ行く程のけしきなりけり

など、手習に馴れにし心なるらむなどやうにうち歎かれて、漸う更け行けば、唯うたゝねに、御帳の前にうち臥し給ひにけり。少將内より出で給ふとておはして、うち叩き給ふに人々驚きて、中の君起し奉りて我が御方へ渡し聞えなどするに、軈て入り給ひて、大將の君のあながちに誘ひ給ひつれば、泊瀬へ參りたりつる程の事など語り給ふに、ありつる御手習のあるを見給ひて、

常磐なる軒のしのぶを知らずしてかれゆく秋のけしきとや思ふ

と書き添へて見せ奉り給へば、いと恥しうて、御顔引き入れ給へる様、いとらうたくこめきたり。かやうにて明し暮し給ふに、中の君の御乳母なりし人は亡せにしが、娘一人あるは、右大臣の少將の御乳母子の、左衛門の尉といふが妻なり。類なくおはするよしを語りけるを、かの左衛門の尉、少將に、「しかじかなむおはする」と語り聞えければ、按察使の大納言の御許には心留め給はず、あくがれ歩き給ふ君なれば、御文など懇に聞え給ひけれど、つゆあるべき事とも覺したらぬを、姫君も聞き給ひて、「思ひの外にあはあはしき身の有様をだに、心憂く思ふ事にて侍れば、まことに強きよすがおはすなる人を」など宣ふもあはれなり。さるは幾程の年長にもおはせず。姫君は、二十に一つなどや餘り給ふらむ、中の君は、今三つばかりや劣り給ふらむ。いと頼しげなき御様どもなり。左衛門、あながちに責めければ、太秦に籠り給へる折を、いとよく告げ聞えてければ、何のつつましき御様なければ、ゆくりなく入り給ひにけり。姉君も聞き給ひて、我が身こそあらめ、いかでこの君をだに人々しくもてなし聞えむと思へるを、様々にさすらふも世の人聞き思ふらむ事も心憂く、亡きかげにも如何に見給ふらむと、はづかしう契口惜しう思さるれど、今はいふかひなき事なれば、いかゞはせむにと見給ふ。これもいとおろかならず思さるれど、按察使の大納言、聞き給はむ所をぞ、父殿急に諫め給へば、今一方よりは、いと待遠に見え給ふ。この右大將殿の少將は、右大臣の北の方の御兄にものし給へば、少將たちもいと親しくおはする。互にこの忍び人も知り給へり。右大臣の少將をば、權の少將とぞ聞ゆる。按察使の大納言の御許に、この三年許りおはしたりしかど

も、心留め給はず世と共にあくがれ給ふ。しのび御事をも大將殿におはするなど思はせ給へり。何れもいとをかしき御振舞を、あながちに制し聞え給へば、いといたく忍びて、大將殿へ迎へ給ふ折もあるを、いと輕々しうつゝましき心地のし給へど、今宣はむ事を違へむもあいなき事なり。あるまじき所へおはするにてもなしなど、さかしだちて進め奉る人々多かれば、我にもあらず時々おはする折もありけり。權の少將は大將殿の上の御風の氣おはするにことつけて、例の泊り給へるに、いと物騒しく客人など多くおはする程なれば、いと忍びて御車奉り給ふに、左衞門の尉も侍はねば、時々もかやうの事に、いとつきづきしき侍にさゞめきて、御車に奉り給ふ。大將殿の上、例ならず物し給ふ程にて、いたく紛るれば、御文もなき由を宣ふ。夜いたく更けて、かしこにまうでゝ、少將殿よりとて「忍びて聞えむ」と言ふに、人々皆寢にけるに、姫君の御方の侍從の君に、「少將殿より」とて御車奉り給へるよしを言ひければ、ねぼけにける心地に、いづれぞと尋ぬる事もなし。例も參る事なればと思ひて、かうかうと君に聞ゆれば、「文などもなし。風にや例ならぬなど言へ」と宣へば、「御使此方」といはせて、妻戸を開けたれば、寄り來るに、「御文なども侍らねば、いかなる事にか。又御風の氣の物し給ふとて」といふに、「大將殿のうへ、御風の氣のむつかしくおはして、人騒しく侍る程なればこの由を申せ、さきざき御使に參り侍る人も候はぬ程にてなど、返す返す仰せられつるに、空しく歸り參りては、必ずさいなまれ侍りなんず」といへば參りて、しかじかと聞えて進め奉れば、例の人の儘なる御心にて、薄色のなよやかなるが、いと染み深う、懷しき程なるを、いとゞ心苦しげにしませて乘り給ひぬ。侍從ぞ參りぬる。御車寄せて下し奉り給ふを、いかであらぬ人とは思さむ。限なく懷しう、なめやかなる御けはひは、いとよく通ひ給へれば、少しも思しも分かぬ程に、漸うあらぬと見なし給ひぬる心惑ひぞ、うつゝとは覺えぬや。かの昔夢見し始よりも、なかなか恐しうあさましきに、やがて引き被き給ひぬ。侍從こそは、「いかにと侍る事にか」と、「これはあらぬ事になむ。御車寄せ侍らむ」と泣く泣くいふを、さばかり色なる御心には許し給ひてむや。寄りて引き放ち聞ゆべきならねば、泣く泣く几帳の後にゐたり。男君はたゞにはあらず、いかに覺さるゝ事もやありけむ、いと嬉しきに、いたう泣き沈み給ふ氣色も道理ながら、いと馴れ顏に、かねてしも思ひあへたらむ事めきて、樣々聞え給ふ事もあるべし。隔てなくさへなりぬるを、女は死ぬばかりぞ心憂く思したる。かゝる事は、例のあはれも淺からぬにや、類なくぞ思さる。あさましき事は、いま一人の少將の君も、母上の御風宜しきさまに見え給へば、かしこへと思せど、夜などきと尋ね給ふ事もあらむに、折節なからむもと思して、御車奉り給ふ。これはさきざきも、御文なき折もあれば、何とも宣はず。例のきよする參りて、「御車」といふを、中し傳ふる人

も一所はおはしぬれば、疑なく思ひてかくと申すに、これもいと俄には思せど、今少し若くおはするにや、何とも思ひいたりもなくて、人々御衣など著せかへ奉りつれば、我にもあらでおはしぬ。御車寄に、少將おはして物など宣ふに、あらぬ御けはひなれば、辨の君「いとあさましくなむ侍る」と申すに、君も心疾く心得給ひて、日頃も、いとにほひやかに見まほしき御樣の、自ら聞き給ふ折もありければ、いかに思ふとだにもなど、人知れず思ひ渡り給ひける事なれば、「何か、あらずとて疎く思すべき」とてかき抱きて下し給ふに、如何はすべき。さりとて我さへ捨て奉るべきならねば辨の君もおりぬ。女君唯わなゝかれて動きだにし給はず。辨いと近うつと捕へたれど、「何とかは思さむ。今は唯さるべきに思しなせ。世に人の御爲惡しき心は侍らじ」とて、几帳おし隔て給へれば、せむ方なくて泣き居たり。これもいとあはれ限なくぞ覺え給ひける。各〻歸り給ふ曉に、御歌どもあれど、例の漏しにけり。男も女もいづかたに唯同じ御心の中に、あいなう胸ふたがりてぞ思さる。さりとて、又もとをおろかにはあらぬ御思ひどもの、珍しきにも劣らず、何方も限なかりけるこそ、なかなか深きしも苦しかりけれ。權の少將殿よりとて御文あり。起きも上られ給はねど、人目あやしさに、辨の君ひろげて見せ奉る。

思はずに我が手になるゝ梓弓深き契のひけばなりけり

あはれと見いれ給ふべきにもあらねば、人目怪しくて、さりげなくて包みて出しつ。今一かたにも少將殿よりとてあれば、侍從の君胸つぶれて見せ奉れば、

淺からぬ契なればぞ涙川同じ流に袖濡らすらむ

とあるを、いづかたにもおろかに仰せられむとにや、返す返す唯同じさまなる御心のうちどものみぞ、心苦しうとぞ本にも侍る。劣り優るけじめなく、樣々深かりける御志ども、はてゆかしうこそ侍れ。猶とりどりなりける中にも、珍しきは猶立ちまさりやありけむに、見馴れ給ふにも、年月もあはれなるかたは、いかゞ劣るべきと、本にも本のまゝまことと見ゆ。

はなだの女御

其の頃の事と、數多見ゆる人眞似のやうに、かたはら痛けれど、これは聞きし事なればなむ。賤しからぬすきものゝ至らぬ所なく、人に許されたるやんごとなき所にて、もの言ひ懸想せし人は、この頃里に罷り出でゝあなれば、實かといきて氣色見むと思ひて、いみじく忍びて、唯小舍人童一人して來にけり。近き透垣の前栽に隱れて見れば、夕暮のいみじくあはれげなるに、簾卷き上げて、只今は見る人もあらじと思ひ顏にうちとけて、皆さまざまに居て、萬の物語しつゝ、人の上言ふな

どもあり。はやりかにうちさゞめきたるも、又恥しげにのどかなるも、數多たはぶれ亂れたるも、今めかしうをかしき程かな。「かの前栽どもを見給へ。池の蓮の露は玉とぞ見ゆる」と言へば、前に濃き單衣、紫菀色の袿、薄色の裳ひきかけたるは、或人の局にて見し人なめり。童の大きなる小きなど緣に居たる、皆見し心地す。「御方こそ、この花は如何御覽ずる」といへば、「いざ人々に譬へ聞えむ」とて、「命婦の君が折る蓮の花は、麿が女院のわたりにこそ似奉りたれ」と宣へば、大君「下草の龍膽はさすがなんめり。一品の宮と聞えむ」。中の君「玉簪花は大王の宮にもなどか」。三の君「紫菀の華やかなれば、皇后宮の御樣にもがな」。四の君「中の君は、父おとゞ常に桔梗をよませつつ、祈りがちなめれば、それにもなどか似させ給はざらむ」。五の君「四條の宮の女御、露草の露にうつろふとかや、明暮のたまはせしこそ、まことに見えしか」。六の君「垣穗の瞿麥は帥殿と聞えましし」。七の君「刈萱のなまめかしき樣にこそ、弘徽殿はおはしませ」。八の君「宣耀殿は菊と聞えさせむ。宮の御覺えなるべきなめり。麗景殿は、花薄と見え給ふ御樣ぞかし、九の君」といへば、十の君「淑景舍は朝顏の昨日の花と歎かせ給ひしこそ道理と見奉りしか」。五郎の君「御匣殿は野邊の秋萩とも聞えつべかめり」。東の御方は「淑景舍の御大臣の三の君、誤りたる事はなけれど、萱草にぞ似させ給へる。いとこの君ぞ、その御大臣の四の君は、芸香といざ聞えむ」。姫君「右大臣殿の中の君は、見れども飽かぬ女郎花のけはひこそし給ひつれ」。西の御方「帥の宮の御上は、さまにや似させ給へる」。伯母君「左大臣の姫君は、吾木香に劣らじ顏にぞおはします」など言ひおはさうずれば、尼君「齋院こえうと聞え侍らむか、變らせ給はざんめればよ。罪を離れむとてかゝるさまにて、久しくこそなりにけれ」とのたまへば、北の方「さて齋宮をば、何とか定め聞え給ふ」と言へば、小命婦の君「をかしきは皆取られ奉りぬれば、さんばれ、軒端の山菅に聞えむ。まことは麿が見奉る帥の宮の上をば、芭蕉葉ときこえむ」。よめの君「中務の宮の上をば、招く尾花と聞えむ」など聞えおはさうずる程に、日暮れぬれば、燈籠に火ともさせて添ひ臥したるも、華やかにめでたくもおはしますものかなと、あはれ暫しはめでたかりし事ぞかし。

世の中のうきを知らぬと思ひしにこは日に物は歎かしきかな

命婦の君は「蓮のわたり此の御容貌もこの御方など、いづれ勝りて思ひ聞え侍らむ。憎き枝おはせじかし。

はちす葉の心廣さの思ひにはいづれと分かず露ばかりにも

六の君は、はやりかなる聲にて、「瞿麥を常夏におはしますといふこそ嬉しけれ。

とこなつに思ひ繁しと皆人はいふなでしこと人は知らなむ

とのたまへば、七の君したり顔にも、

刈萱のなまめかしさの姿にはそのなでしこも劣るとぞ聞く

とのたまへば、皆人々も笑ふ。「まろがきくの御方こそ、ともかくも人に言はれ給はね。

植ゑしよりしげりましにし菊の花人に劣らで咲きぬべきかな

とあれば、九の君「羨しくも思すなるかな。

秋の野の亂れて招く花薄思はむかたに靡かざらめや

十の君「まろが御前こそ怪しき事にて、くらされて」などいとはかなくて、

朝顔の疾く凋みぬる花なれど明日も咲くはと頼るゝかな

と宣ふにおどろかれて、五の君「うち臥したれば、はや寝入りにけり。何事のたまへるぞ。まろは華やかなる所にし侍らはねば、萬心細く覺ゆるかな。

頼む人露草ごとに見ゆめれば消えかへりつゝ歎かるゝかな

と寝おびれたる聲にて、又寝るを人々笑ふ。女郎花の御方「いたく暑くこそあれ」とて扇を使ふ。「いかにとて參りなむ。戀しくこそおはしませ。

皆人も飽かぬ匂も女郎花よそにていとゞ歎かるゝかな

夜いたく更けぬれば、皆寝入りぬるけはひを聞きて、

秋の野の千草の花によそへつゝなど色毎に見るよしもがな

とうち嘯きたれば、「あやし。誰かいふぞ。覺えなくこそ」といへば、「人は只今はいかゞあらむ。鶏の鳴きつるにやあらむ。忌むなるものを」といへば、はやりかなる聲にて、「をかしくもいふかな。鶏は、いかでかかくも嘯かむ。いかにぞや聞き給ひつや」。所々聞き知りてうち笑ふめり。やゝ久しくありて、物言ひ止むほど、

思ふ人見しも聞きしも數多ありておぼめく聲はありと知りぬる

このすきものたゝけり。「あなかま」とて物も言はねば、簀子に入りぬめり。「あやし。いかなるぞ。ひと所だにあはれと宣はせよ」などいへば、いかに思ふにかあらむ、絶えて答へもせぬ程に、曉になりぬる空の氣色なれば、「まめやかに見し人とも思したらぬ御歎きどもかな。見も知らぬ古めかしうもてなし給ふものかな」とて、

百かさね濡れ馴れにたる袖なれど今宵やまさり濡ぢて歸らむ

とて出づる氣色なり。例のいかになまめかしうやさしき氣色ならむ、出でやせましと思へど、あぢきなく、一所にとぞ思ひける。

この女達の親卑しからぬ人なれど、いかに思ふにか、宮仕に出したて、殿ばら、宮ばら、女御達の御許に、一人づゝ參らせたるなりけり。同じ兄弟ともいはせで、他人の子になしつゝぞありける。この殿ばらの女御たちは、皆挑ませ給ふ御中に、同じ兄弟の別れて侍ふぞ怪しきや。皆思して侍ふは、知らせ給はぬにやあらむ。すきものばらの御有樣ども、聞き嬉しと思ひ至らぬ處なければ、この人どもゝ知らぬにしもあらず。かの女郎花の御方と言ひし人は、聲ばかりを聞きし、志深く思ひし人なり。瞿麥の御人といひしは、睦まじくもありしを、いかなるにか、見つとも言ふなと誓はせて、又も見ずなりにし。刈萱の御人は、いみじく氣色だちて、物言ふ答へをのみして、辛うじて年經つべき折は、いみじく賺し謀る折のみあれば、いみじくねたしと思ふなりけり。菊の御人は、言ひなどはせしかど、殊にまほにはあらで、「誰そまやまを」とばかりほのかに言ひ、ゐざり入りしけはひなむいみじかりし。花薄の御人は、思ふ人も又ありしかば、いみじくつゝみて唯夢のやうなりし宿世の程もあはれに覺ゆ。蓮の御人は、いみじくしたのめて、さらばと契りしに、騷しき事のありしかば、引き放ちて入りしを、いみじと思ひながら許してき。紫菀の御人は、いみじく語らひて、今に睦しかるべし。朝顏の人は、若うにほひやかに愛敬づきて、常に遊び敵にてはあれど、名殘なくこそ。桔梗は常に恨むれば、「騷がぬ水ぞ」と言ひたりしかば、「澄まぬに見ゆる」など言ひし、にくからず。いづれも知らぬは少くぞありける。その中にも、女郎花のいみじくをかしく、ほのかなりし末ぞ、今にいかで、唯よそにて語らはむと思ふに、心憎く、今一度ゆかしき香を、いかならむと思ひも定めたる心なくぞありくなる。至らぬ里へなどは、いともて離れて、言ふ人をばいとをかしく言ひ語らひ、兄弟といひ、いみじく語らへば、暫時こそあれ、顏容貌の見るになどかくはある。物言ひたる有樣なども、この人には、かゝる人いとなかり。宮仕人、さならぬ人の女なども謀らるゝあり。內裏にも參らで徒然なるに、かの聞きし事をぞ、その女御の宮とて、長閑にはかの君こそ容貌をかしかんなれなど、心に思ふ事歌など書きつゝ、手習にしたりけるを、又人の取りて書き寫したれば、怪しくもあるかな。これら作りたるさまも覺えず、よしなき物の樣かな。虛言にもあらず、世の中に虛物語多かれば、實ともや思はざるらむ。これ思ふこそ妬けれ。多くは容貌しつらひなども、この人の言ひ心がけたるなめり。誰ならむ、この人を知らばや。殿上には、只今これをぞ、怪しくをかしと言はれ給ふなる。かの女たちは、此處には親族多くして、かく一人づゝ參りつつ、心々に任せて逢ひて、斯くをかしく殿の事言ひでたることをかしけれ。それもこのわたり、いと近くぞあんなるも、知り給へる人あらば、その人と書きつけ給ふべし。

はいずみ

下京邊に、品賤しからぬ人の、事叶はぬ人をにくからず思ひて、年ごろ經る程に、親しき人の許へいき通ひける程に、女を思ひかけて密に通ひありきけり。珍しければにや、初の人よりは志深く覺えて、人目も憚まず通ひければ、親聞きつけて「年頃の人を持ち給へれども如何はせむ」とて許して住ます。もとの人聞きて、「今は限なめれ、通はせてなどもよもあらせじ」と思ひわたる。「往くべき所もがな、辛くなり果てぬ前に離れなむ」と思ふ。されどさるべき所もなし。今の人の親などは、おし立ちて言ふやう、「妻などもなき人の、切に言ひしにあはすべきものを、かく本意にもあらで、おはしそめてしを、口惜しけれど、いふ甲斐なければ、かくてあらせ奉るを、世の人々は妻する給へる人を思ふと、さいふとも家にするゑたる人こそ、やごとなく思ふにはあらめなどいふも安からず。げにさる事に侍る」など言ひければ、男「人數にこそ侍らねど、志ばかりは勝る人あらじと思ふ。彼方には渡し奉らぬを、おろかに思さば、只今も渡し奉らむ。いと異樣になむ侍る」といへば、親「然だにあらせたまへ」と押し立ちていへば、男「哀れ彼も、何方遣らまし」と覺えて、心のうち悲しけれども、「今のがやごとなければ、かく」など言ひて、氣色も見むと思ひて、元の人の許いぬ。

見ればあてにこゞしき人の、日頃物を思ひければ少し面痩せていと哀れげなり。うち恥ぢしらひて、例のやうに物も言はでしめりたるを、心苦しう思へど、さいひつれば言ふやう、「志ばかりは變らねど、親にも知らせで、斯樣にまかりそめてしかば、いとほしさに通ひ侍るを、辛しと思すらむかしと思へば、何とせしわざぞと今なむ悔しければ、今もえかき絶ゆまじうなむ。彼處に土をらすべきを、こゝに渡れとなむいふを、如何思す。外へやいなむと思す。何かは苦しからむ。かくながら端つ方におはせよかし。忍びて忽ちにいづちかはおはせむ」などいへば、女「こゝに迎へむとて言ふなめり。これは親などあれば、此處に住まずともありなむかし。年頃行く方もなしとみるみるかくいふよ」と、心憂しと思へど、つれなく答ふ。「さるべき事にこそ。はや渡し給へ。何方も何方もいなむ。今までかくてつれなく、うき世を知らぬ氣色こそ」といふ。いとほしき男「など斯う宣ふらむ。驕てにてはあらず。たゞ暫しの事なり。歸りなば又迎へ奉らむ」と言ひ置きて出でぬる後、女、使ふ者と、さし向ひて泣き暮す。「心憂きものは世なりけり。いかにせまし。おし立ちて來むには、いとかすかにて出で見えむもいと見苦し。いみじげに怪しうこそはあらめ。かの大原のいまこが家へいかむ。彼より外に知りたる人なし」。かく言ふはもと使ふ人なるべし。「それは片時おはしますべくも侍らざりしかども、さるべき所の出で來むまでは、まづおはせ」など語らひて、家の内清げに

掃せなどする。心地もいと悲しければ、泣く泣く恥しげなる物燒かせなどする。今の人明日なむ渡さむとすれば、この男に知らすべくもあらず。車なども誰にか借らむ、送れとこそは言はめと思ふも、をこがましけれど言ひ遣る。今宵なむ物へ渡らむと思ふに、車暫し」となむ言ひやりたれば、男、あはれいづちとか思ふらむ、往かむさまをだに見むと思ひて、今こゝへ忍びてきぬ。女、待つとて端に居たり。月の明きに泣く事限りなし。

我が身かくかけ離れむと思ひきや月だに宿をすみ果つる世に

と言ひて泣く程に、來ればさりげなくて、うちそばむきて居たり。「車は牛たがひ馬なむ侍る」といへば、「唯近き所なれば車は所狹し。さらばその馬にても、夜の更けぬ前に」と急げば、いとあはれと思へど、かしこには皆朝にと思ひためれば、遁るべうもなければ、心苦しう思ひ思ひ、馬牽きいださせて、簀子に寄せたれば、乘らむとて立ちいでたるを見れば、月のいと明きかげに、有樣いとさゝやかにて、髮はつやゝかにて、いともいと美しげにて丈ばかりなり。男手づから乘せて、此處彼處ひき繕ふに、いみじう心憂けれど、念じて物も言はず。馬に乘りたる姿頭つき、いみじくをかしげなるを哀と思ひて、「送りに我も參らむ」といふ。「唯こゝもとなる所なれば、あへなむ。馬は只今返し奉らむ。その程は此處におはせ。見苦しき所なれば、人に見すべき所にも侍らず」といへば、

さもあらむと思ひて、留りて尻うちかけて居たり。この人は、供に人多くはなくて、昔より見馴れたる小舍人童一人を具していぬ。男の見つる程こそ隱して念じつれ、門ひき出づるより、いみじく泣きて行くに、この童いみじく哀に思ひて、この使ふ女をしるべにて、はるばるとさして行けば、「唯こゝもとに仰せられて、人も具せさせ給はで、かく遠くはいかに」と言ふ。山里にて人もありかねば、いと心細く思ひて泣きて行くを、男もあばれたる家に、唯一人眺めて、いとをかしげなりつる女ざまの、いと戀しく覺ゆれば、人やりならず、いかに思ひゐたらむと思ひ居たるに、やゝ久しくなり行けば、簀子に、足しもにさし下しながら寄り臥したり。

この女は、未だ夜中ならぬ前に往き著きぬ。見ればいと小さき家なり。この童「いかにかかる所には、おはしまさんずる」と言ひて、いと心苦しと見居たり。女は「はや馬率て參りね。待ち給ふらむ」といへば、「いづこにかとまらせ給ひぬると、仰せ候はゞ、いかゞ申さんずる」といへば、泣く泣く、「かやうに申せ」とて、

いづこにか送りはせしと人問はゞ心はゆかぬ涙川まで

といふを聞きて、童も泣く泣く馬にうち乘りて、程もなく來著きぬ。男うち驚きて見れば、月も漸う山の端近くなりにたり。あやしく遲く歸るものかな、遠き所へ往きけるにこそと思ふも、いとあ

はれなれば、

住み馴れし宿を見棄てゝゆく月の影におほせて戀ふるわざかな

といふにぞ、童歸りたる。「いと怪し。など遲くは歸りつるぞ。何處なりつる所ぞ」と問へば、ありつる歌を語るに、男いと悲しくてうち泣かれぬ。此處にて泣かざりつるはつれなしを作りけるにこそと、哀れなれば、いきて迎へ返してむと思ひて、童にいふやう、「さまでゆゝしき所へいくらむとこそ思はざりつれ。いとさる所にては、身もいたづらになりなむ。猶迎へ返してむとこそ思へ」と言へば、「道すがら小止みなくなむ泣かせ給ひつる」と、「あたら御さまを」といへば、男明けぬさきにとて、この童供にていと疾くいき著きぬ。げにいと小くあばれたる家なり。見るより悲しくて、打ち叩けば、この女は來著きにしより、更に泣き臥したる程にて、「誰ぞ」と問はすれば、この男の聲にて、

涙川そことも知らず辛き瀬をゆきかへりつゝながれ來にけり

といふを、女いと思はずに、似たる聲かなとまであさましう覺ゆ。「開けよ」と言へば、いと覺えなければど、開けて入れたれば、臥したる所に寄り來て、泣く泣くをこたりを言へど、答へをだにせで泣くこと限なし。「更に聞えやるべくもなし。いとかゝる所とは思はでこそいだし奉りつれ。返りては、御心のいと辛くあさましきなり。萬は長閑に聞えむ。夜の明けぬ前に」とてかき抱きて馬にうち乘せていぬ。女いとあさましく、いかに思ひなりぬるにかと、呆れて往き著きぬ。おろして二人臥しぬ。萬に言ひ慰めて、「今よりは更に彼處へ罷らじ。かく思しける」とて又なく思ひて、家に渡さむとせし人には、「こゝなる人の煩ひければ、折あしかるべし。怪しかるべし。この程を過して、迎へ奉らむ」と言ひやりて、唯こゝにのみありければ、父母思ひ歎く。この女は夢のやうに嬉しと思ひけり。

この男いと引切りなりける心にて、あからさまにとて、今の人の許に晝間に入り來るを見て、女、「俄に殿おはすや」といへば、うちとけて居たりける程に心驚ぎて、「いづら、何處にぞ」と言ひて櫛の箱を取り寄せて、白きものをつくると思ひたれば、取り違へて、掃墨入りたる疊紙を取り出でて、鏡も見ずうち裝束きて、女は「そこにて暫しな入り給ひそといへ」とて是非も知らずきしつくる程に、男「いとゞしくも疎み給ふかな」とて簾をかき上げて入りぬれば、疊紙を隱して、おろおろにならして、口うち覆ひて、夕まぐれにしたてたりと思ひて、まだらに指がたにつけて、目のきろきろとして瞬き居たり。男見るに、あさましく珍らかに思ひて、いかにせむと恐しければ、近くも寄らで、「よし今暫しありて參らむ」とて、暫し見るもむくつけゝれば往ぬ。女の父母、かく來たり

と聞きて來たるに、はや出で給ひぬ」といへば、いとあさましく、「名殘なき御心かな」とて、姫君の顔を見ればいとむくつけくなりぬ。おびえて父母も倒れ伏しぬ。むすめ「などかくは宣ふぞ」といへば、「その御顔はいかになり給ふぞ」ともえ言ひやらず。「怪しく、などかくは言ふぞ」とて、鏡を見る儘に、かゝれば我もおびえて鏡投げ捨てゝ、「いかになりたるぞや、いかになりたるぞや」とて泣けば、家の内の人もゆすりみちて、「是をば思ひ疎み給ひぬべき事をのみ、彼處にはし侍るなるに、おはしたれば御顔のかくなりにたる」とて、陰陽師呼び騒ぐほどに、涙の落ちかゝりたる所の例のはだになりたるを見て乳母、紙おし揉みて拭へば、例の肌になりたり。「かゝりけるものを、徒になり給へる」とて、騒ぎけるこそ、返す返すをかしけれ。

よしなしごと

人のかしづく女を、ゆゑだつ僧、忍びて語らひける程に、年の果に山寺に籠るとて、「旅の具に、莚・疊・盥・匜貸せ」と言ひたりければ、女長莚何やかや供養したりける。それを女の師にしける僧の聞きて、我も物借りにやらむとて、書きてありける文の詞のをかしさに、書き寫して侍るなり。世づかずあさましき事なり。

「唐土新羅に住む人、さては常世の國にある人、我が國にはやまかつしなつくの戀まろなどや、かゝる詞は聞ゆべき。それだにも、すだれあみの翁は、かし太子の女に名立ち、賤しき中にも、心の生先侍りけるになむ。それにも劣りたりける心かなとは思すとも、理なき事の侍りてなむ、世の中の心細く悲しうて、見る人聞く人は、朝の霜と消え、夕の雲とまがひて、いと哀なる事がちにて、『あるは少く、なきは數添ふ世の中』と見え侍れば、『我が世や近く』とながめ暮すも、心地すぐし難き事がちにて、猶世こそ電光よりも程なく、風の前の火より消え易きものなれども、うら悲しく思ひ續けられ侍れば、『吉野の山のあなたに家もがな。世の憂き時のかくれがに』と、際高く思ひ立ちて侍るをいづこに籠り侍らまし。富士の嶽と淺間の峰との狹ならずば、竈山と日の御崎との絶間にまれ、さらずば、白山と立山とのいきあひの谷にまれ、又愛宕と比叡の山との中あひにもあれ、人のたはやすく通ふまじからむ所に、跡を絶えて籠り居なむと思ひ侍るなり。この國には、なほ近し。唐土の五臺山、新羅の峰にまれ、それも猶け近し。天竺の山に、鷄の峰の岩屋にまれ籠り侍らむ、それも猶地近し。雲の上にひらき登りて、月日の中にまじり霞の中に飛び住まばやと思ひたちて、此の頃出で立ち侍るを、いづちまかるとも身を棄てぬものなれば、要るべき物ども多く侍る。誰にかは聞えさせむ。年頃も御覽じて久しくなりぬ。情ある御心とは聞き渡りて侍れば、かゝる折

だに聞えむとてなむ。旅の具にしつべき物どもやはんべる。貸させ給へ。まづ入るべき物どもよな。雲の上にひらき上らむ料に、天の羽衣一つ、いと料にはべる。求めて給へ。それならでは、たゞの袙・衾、せめてならば、布の破襖にても。又は十餘間の檜皮屋一つ、廊・寢殿・大殿・車宿も用侍れど遠き程は所狹かるべし。唯腰に結ひつけて罷るばかりの料に、やかた一つ、疊などや侍る。錦端、高麗端、繻纈、紫端の疊、それ侍らずは、布緣さしたらむ破疊にてまれ貸し給へ。瓊江にかゝる眞菰にまれ、逢ふ事交野の原にある菅薦にまれ、唯あらむを貸し給へ。十布の菅薦な給ひそ。莚は荒磯海の浦にうつるなる出雲莚にまれ、いきの松原の邊に出來なる筑紫莚にまれ、みるをが浦に刈るなる三總莚にまれ、底いる入江に刈るなる田竝莚にまれ、七條の繩莚にまれ、侍らむを貸させ給へ。全きなくば破莚にても貸させ給へ。屏風も用侍る。唐繪、大和繪、布屏風にても、唐土の黃金を緣に磨きたるにもあれ、新羅の玉を釘に打ちたるにまれ、これらなくば網代屏風の破れたるにもあれ貸し給へ。盥や侍る。丸盥にまれ、うち盥にもあれ貸し給へ。それなくば、かけ盥にまれ貸し給へ。けぶりが崎に鑄るなる能登鼎にてもあれ、待乳河原に作るなる讃岐釜にもあれ、石上にあなる大和鍋にてもあれ、筑摩の祭に重ぬる近江鍋にてもあれ、楠葉の御牧に作るなる河內鍋にまれ、いちかとにうつなる鍑にまれ、とむ片岡に鑄るなる鐵鍋にもあれ、飴鍋にもあれ貸し給へ。多く世

に作るなる火桶折敷もいるべし。信樂の大笠、あめの下の連り簑も大切なり。いま手箱、筑紫革籠もほしく侍る。せめては浦島の子が革籠にまれ、そでの皮袋にまれ貸し給へ。侘しき事なれど、露の命絶えぬ限は食物も用侍る。めうかくしの信濃梨、斑鳩山の枝栗、三方の郡の若狹椎、天の橋立の丹後和布、出雲の浦の甘海苔、みのはしのかもまがり、若江の郡の河內蕪と、野洲栗本の近江餅、小松が本のいか乾瓜、掛田峰の松の實、みちくの島の郁子山女、こ山の柑子橘、これら侍らずば、やもめの邊の熬豆などやうの物賜はせよ。いでやいるべき物どもいと多くはべる。せめてはたゞ足鍋一つ、長莚一つら、盥一つなむいるべき。もしこれら貸し給はゞ、心なからむ人にな賜ひそ。ここに仕ふ童おほそうのかけろ二、海の水の泡といふ二人の童に賜へ。出で立つ所は、科戶の橋の上の方に、天の川のほとり近く、鵲の橋づめにも侍る。そこに必ず贈らせ給へ。これら侍らずば、え罷りのぼるまじきなめり。世の中に物の哀知り給ふらむ人は、これらを求めて賜へ。猶世を憂しと思ひ入りたるを、諸心にいそがし給へ。かゝる文など人に見せさせ給ひそ。ふくつけたりけるものかなと見る人もぞ侍る。御返りはこゝによ。ゆめゆめ徒然に侍るまゝに、よしなし事ども書きつくるなり。聞く事のありしに、いかにいかにぞや覺えしかば、風の音、鳥の囀り、蟲の音、浪のうち寄せし聲に、たゞそへ侍りしぞ」。

冬ごもる空の景色に、しぐるゝたびにかき曇る袖の晴間は、秋より殊に乾く間なきに、群雲晴れゆく月の殊に光さやけきは、木の葉がくれだになければにや、猶しのばれぬなるべし。あくがれ出で給ひて、あるまじき事と思ひ返せば、外ざまにと思ひたゝせ給ふが、猶えひき過ぎぬなるべし。いと忍びやかに入りて、數多人のけはひする方にうちとけ居たらむ氣色もゆかしく、さりとも自らの有樣ばかりこそあらめ、何ばかりのもてなしにもあらじを、大方のけはひにつけても。

堤中納言物語 終

昭和十一年五月廿五日印刷
昭和十一年五月三十日發行

いてふ本
平安朝物語集

定價 金五拾錢

編輯者 三教書院編輯部
代表者 鈴木種次郎

發行者 東京市中野區高根町六番地 鈴木種次郎

印刷者 東京市本所區東駒形三丁目十番地 西野末雄

印刷所 東京市本所區東駒形三丁目十番地 文化印刷株式會社

いてふ本校訂者
沼波瓊音　山田美妙　杉谷代水　泉斜汀　山内素行　石村貞吉　山田三子　所金藏　上村靜人　郷巖白　島悅次　中島文　川添子

不許複製

發行所 東京市中野區高根町六番地 三教書院
營業所 東京市神田區錦町一ノ十五 電話神田二四〇八番 振替東京四五八〇番

（東京・浦野製本）

67
467

いてふ本刊行の辭

現在の出版界は、吾人の如き非多なる者の一切の出版物を當時の高價に比して、その價値の多くは、新版の書籍に於ては、大部分の讀者の方に於ては、必ずしも、その價値を認めざるものである。

今日の出版界は、新版の書籍に於ては、大部分の讀者の方に於ては、必ずしも、その價値を認めざるものである。

昭和十年五月　三教書院主

いてふ本既刊目錄（昭和十一年五月現在）

古事記全
日本書紀上・中
愚管抄全
神皇統記全
萬葉集上・下
枕草子全
今和歌集全
平家物語上・中・下
保元・平治物語全
增鏡全
曾我物語上・下
義經記全
徒然草全
源氏物語（桐壺上り花散里）
平安朝物語集全
平安朝日記集全
近松心中物全
西鶴物全
俳諧七部集全
蕪村七部集全

雨月物語全
日本外史上・中
論語全
文章軌範全
唐詩選全
三體詩全
武經七書全
武將感狀記全
白隱法語集全
駿臺雜話全
益軒養生訓全
附家道訓
日蓮大士眞實傳全
新編水滸畫傳一―五
東海道中膝栗毛上・下
修紫田舍源氏全四册
釋迦八相倭文庫一・二
いろは文庫上・下

和綴の表紙は始めに絲の綴目の處にしつかりと折り目を付けて下さい。さうすれば表紙に皺がよらず耐久力は殆ど永久的です。

終